

平成6年 10月 お伊勢さん 125社めぐり
甲鳥めぐり 参拝 6社

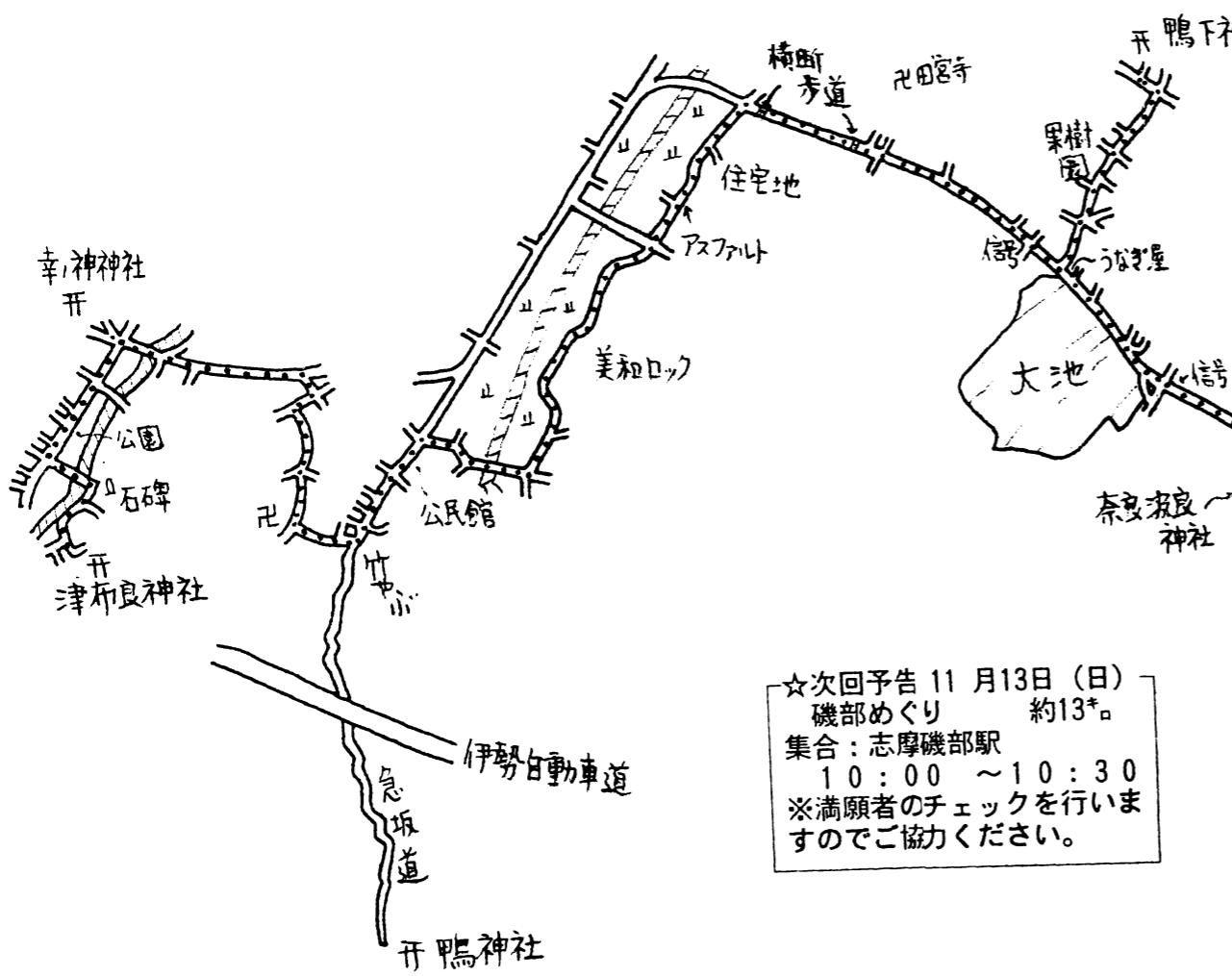
伊勢市駅=バス=幸ノ神神社

鴨神社（道路崩壊のため遷拝）

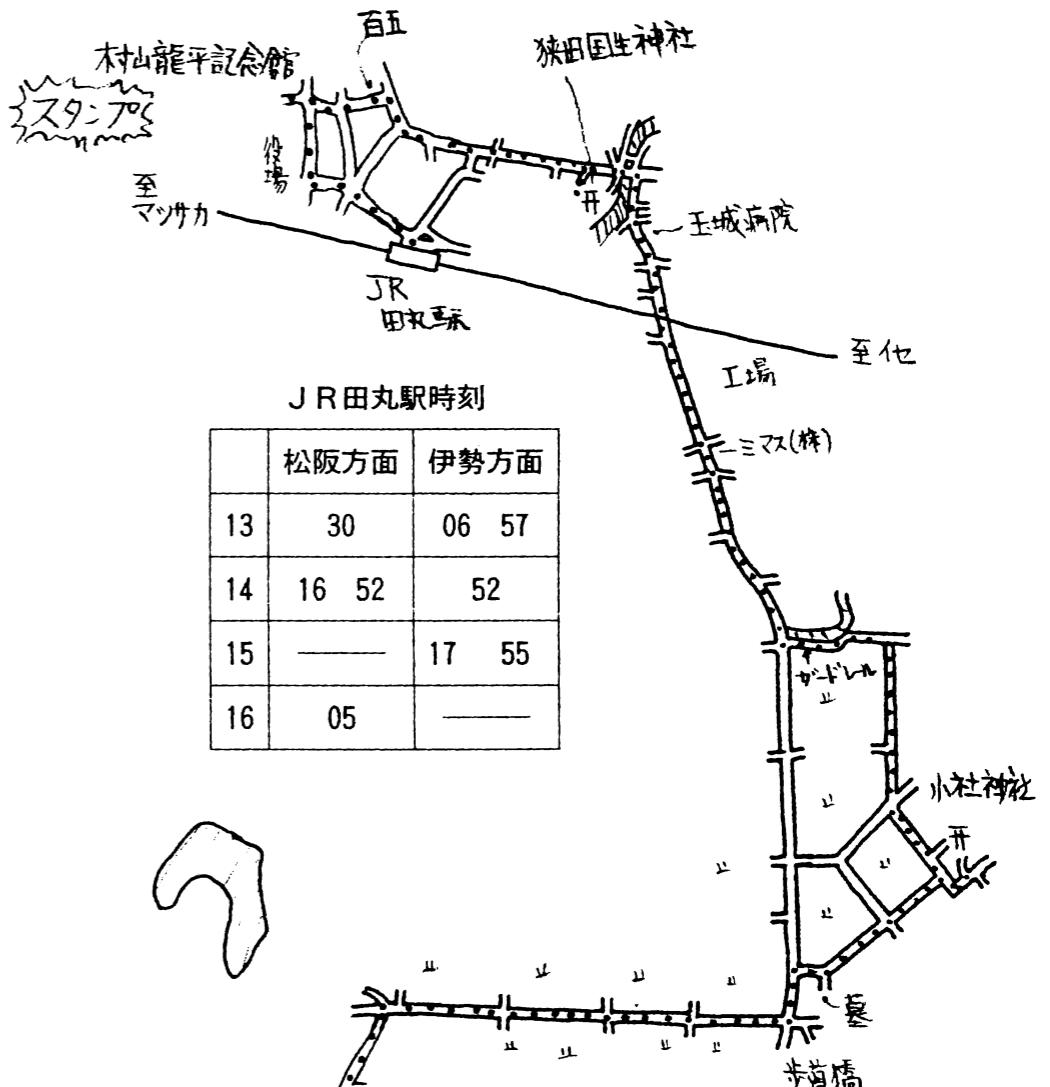
奈良波良神社

広泰寺 小社神社 狹田
(昼食)
JR田丸駅 (約1.2キロ)

国生神社 村山龍平記念館
(スタンダ)



☆次回予告 11月13日(日)
磯部めぐり 約13^{km}
集合:志摩磯部駅
10:00 ~ 10:30
※満願者のチェックを行いま
すのでご協力ください。



	松阪方面	伊勢方面
13	30	06 57
14	16 52	52
15	—	17 55
16	05	—

選舉
平記念館
10/23
村山龍318

この地は、もと皇大神宮の祢宜荒木田氏が開拓した土地である。そのため、この地域にある摂末社は、荒木田氏との関係により、いずれも内宮の摂社末社に属している。

ここにある神社には、いずれも田や畠の灌溉の水の神、川の神、田の神が祭られている。

○幸神

矢野・蚊野・原道が集まる積良の小高い森に猿田彦を祭神とする幸神が祭られている。

「記紀」の天孫降臨の中に、猿田彦神は自ら「ちまたの神」となのって天孫の道案内に立たれたとされている。「ちまた」とは道の分かれる所、分岐点のことで、村内へ邪靈の入り込むのを防ぐ塞（さえ）の神とされるようになった。江戸時代には各地に幸神社が祭られ、湯田、門前、久保の丘神境内にも幸神社が同座していた。

この地の幸神は近郷にきこえた古い神社で、起源は不明。猿田彦にちなんで初申の日に大祭が行なわれ、子授け、安産、除災を願う人々で賑う。

※ 塞は境で境界であることから、坂の上や峠や辻や村境が塞にみたてられて悪靈や病魔を防ぐサヘノカミ道祖神が祭られるようになった。この信仰は、仏教の冥界思想と習合し、地獄と極楽の境といわれるサイの河原をさまよう亡者を救う地蔵信仰にもなっていった。

○津布良神社（皇大神宮末社）

祭神

津布良比古命

津布良比売命

地名のツムロ、社名のツブラは、伊勢市の津村と同じく「土群（つちむれ）」、「圓（つぶら）」の意で、斎宮忌詞に墳墓を「土群（つむら）」と称することによるものである。

この山麓一帯に、荒木田氏の祖先の墳墓である古墳が多いことから、古

くからツムロ、ツブラと呼ばれてきたものである。

祭神は大水神の子であることから、積良の田野の水の神として尊ばれてきたことがわかる。

この社も、中世社地を失うが、明治六年、村民の請により積良の産土神八柱神社の中に再建した。この地は荒木田氏祖先の墳墓の地であるため、昔は荒木田氏に入々により祖先の氏神祭りが行なわれた。

神社の境内は苔なめらか、文化十二年の在銘の水盤がある。静けさの中に荒木田氏の昔がしのばれる。

八柱神社は明治四十一年、外城田神社に合祀されている。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	板打連子	壹重
鳥居	神明造	壹基

○鴨神社（皇大神宮摂社） 祭神 石己呂和居命
御前神

昔は造宮使造替六社の一つで、両正宮の遷宮と同時に遷宮の行なわれる格式の高い摂社であった。

延喜式神名帳には鴨神社とあるが、儀式帳や大神宮式、斎宮式には、ただ鴨社とのみ記されている。

鴨というのは、この山神の地名で、「大神宮諸雜記」に「度会郡城田郷石鴨村」とあるのはこの地のことである。

儀式帳には「来田郷山上村にあり」とみえている。山上とは大日山の麓の意味である。そしてその四至は、東、南、西は山、北は公田とあることから、現在の山中ではなく、もう少し麓にあったものと思われる。

祭神の石己呂和居命は、大水上神の子といわれるところから、農耕灌漑の守護神であったことが想像される。

現在の社殿の東上、100mほどのところに岩窟があり清水が湧出して

いる。付近に鳥居堂、明神の森などという小字をのこしていることから、この社地付近も古くから水の神の信仰を伝えていた土地であることがわかる。（稻作が進むにつれ、山の神は里に下り田の神となり、取入れが終ると再び山に帰って山の神になると信じるようになった。山に上社、里に下社を祭り、山の神、田の神として崇め王作を祈った。山腹の鴨社と勝田の鴨下社がそれである。）

この社も寛文三年の再興。ただし御前神の社殿は再興されず、本殿の中に同座している。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門板扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○田宮寺

高野山真言宗の寺で、奈良時代、行基が聖武天皇の勅令によって創建したと伝えられる。空海を中興の祖とし、10世紀末に内宮長官荒木田氏長が再興してからは荒木田氏の氏寺となった。そのため、荒木田神主たちが真言宗の僧侶の中から歴代の住職を選び、神宮法楽寺として維持した。戦国期には北畠氏の信仰も得て寺領も与えられたが信長の伊勢攻めのとき兵火によって焼失した。その後再興され、豊臣氏、稲葉氏、藤堂氏、紀州徳川氏から寺領を認められ明治維新を迎えたが、廃仏毀釈により堂宇のほとんどが破却され廃寺となった。

現在、観音堂と庫裡をのこすだけである。2体の木造十一面観音像が安置され、1体は像高170cmで彩色がほどこされ、もう1体は像高168cmの漆箔像である。（ともに国重要文化財）

○鴨下神社（皇大神宮末社）

祭神 石己呂和居命

鴨比古命

鴨比売命

田宮寺の東隣、大字勝田にある、山神の鴨神社からみると、山裾の方であることから鴨下神社という。

祭神は大水上神の子で、勝田の田野の水利灌漑を司さどる守護の神である。

「類聚神祇本源所引」の社記に、「鴨社城田郷山上村にあり、前社同郷狩田村に在り」としている。つまり、皇大神宮摂社鴨神社の前社である。

山上は今の玉城町山神、狩田は今の同町勝田である。その距離は約4km神宮摂社の前社でこのように遠隔に祭られ、また本社と別の社号をつけられた例はない。鴨下神社は摂社の鴨神社と区別するためつけられた社号で、鴨神社の前社ではないという説もある。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○奈良波良神社（皇大神宮摂社） 祭神 那良原比女命

延喜式神名帳には奈良波良神社とあるが、同大神宮式や斎宮式にはただ奈良波良社と見え、儀式帳には櫛の字を当て櫛原神社と書いてある。櫛原の名から、この一帯が櫛の木の原野であったことが推測できる。

祭神は那良原比女命、儀式帳によれば、大水上命の子であると伝えている。櫛原の地域の田野灌漑の御田の守護神である。

この社も戦国争乱の余波を受け頽廃、寛文三年再興された。神社の入口に紀州藩の建てた、「禁殺生」「享保甲辰」の石の標柱がある。ここ宮古の地は、「外宮神領目録」に「宮古御園」とあり、古くから外宮の神領地となっていたところである。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
----	---------	----

玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○広泰寺

一休宗純と並ぶ名僧といわれた玄虎禪師によって文明十八年(1486)年に開かれた曹洞宗中本山であった。

元禄十四年(1701)には伊勢の紀州領18万石の触頭僧録司を命じられ、度々の火災にも紀州藩の援助で再建された。

和宮降嫁のとき御衣料絵師となった南島町出身の野村訥斎が当寺で描いたという「虎の図」など数点が秘蔵されている。

ここから北へ700mほど行くと、お頭神事の際禊をする場として使用されている宮古の石風呂がある。この石風呂は焚き口から薪を焚いて石造の釜を焼き、釜の上にわたした青竹でつくった簾子の上にひろげられたぬれむしろの上から、近くの池の水をかけて蒸気をたちのぼらせ、発汗させて身を清める蒸し風呂の一種である。

○小社神社（皇大神宮末社） 祭神 高水上命

神社の入口に、天保三年三郷若連中から奉納の水磐がある。

皇大神宮延暦儀式帳にその名がある。垂仁天皇の御代、倭姫命の時、祝い定められた。一千年以上の昔から、この地の産土神として鎮座していた神である。

儀式帳に大水上神の子と申し伝えている。南の大日山の谷間から発する水が下外城田を貫流して宮川に注いでいるが、この川が小社の田野の灌漑用水に供されているので、この川の水の御陰を尊び高水上命と申し上げたものである。

この神社は皇大神宮の神主、荒木田氏がこの地方を開拓した当時、産土神として尊んだ神で、荒木田氏は後に宇治に移り住むが、後々までこれを氏神の一つとして尊び、建久年中行事によると、毎年四月の初の申の日には荒木田神主が一族を引き連れて本社に参拝したことが見えている。

戦国時代、社殿頽廃、社地すら不明となつた。明治三年、神宮より神祇官の出張所に呈した文書には、小社村の産土神を以て本社の旧地となすとある。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○狭田国生神社（皇大神宮摂社） 祭神 速川比古
速川比売
山末御玉

社頭に享保甲辰に紀州藩の建てた「禁殺生」の社標の石柱がある。

儀式帳には狭田神社、延喜式神名式には狭田国成神社、同大神宮式や神名秘書には狭田国生社とみえている。

鎮座の佐田は、社名の狭田と同じく狭田。長田の狭田で、田邊郷を流れる外城田川の支流に挟まれた細長い田のことである。そこを支配する、そして国土の成育を司る神が国生の神である。

祭神の速川比古、速川比売は外城田川の川の神で、この狭田の沃野の灌漑用水を司る神で、山末御玉の神は田丸山の麓におられた神である。

鎮座の縁起については、

倭姫命が皇大神を奉じて伊蘇宮から寒川（今の外城田川）をさかのぼられ、この地に御遷幸のとき、速川比古命をお迎え申し上げ、この地は畦廣之狭田の国と申し、佐々上の神田を奉った功績により倭姫命が速川狭田社をつくられたという。今も外城田川の南岸に「ササガミ」と名の付いた耕地がある。佐々上神田の遺跡である。

殿舎

正殿	神明造板葺南面	壹宇
----	---------	----

玉垣御門	猿頭門扉付	壹間
玉垣	連子板打	壹重
鳥居	神明造	壹基

○田丸城

南北朝時代の延元元年（1336）、伊勢に下向した北畠親房が、参宮街道と熊野街道の分岐する要衝の地、玉丸山に築いた城である。興国三年（1342）年、北朝方の仁木義長・高師秋により落城するが、両朝合一後は北畠氏の支城となる。

天正三年（1575）、北畠の養子、織田信雄が修築するが、同八年焼失、その後稻葉道通が大修築し、元和元年（1615）の大坂の役以後、藤堂高虎の領有となった。

標高50mの丘に築かれた平山城で、外城田川の流れを変えて城下町を取り囲む外堀とする。現在、城山公園として整備され、田丸中学校、玉城町役場、田丸小学校などが建っている。

○田丸城奥書院

この奥書院は、延宝五年（1677）に城主久野氏三代宗俊公が場内三の丸に建てた御殿の一部といわれ、明治維新後、明和町竹川の副田氏宅へ払い下げられていたもので、このたび120年ぶりに城郭内に里帰りが実現したものである。

建物は、瓦葺平家建てで、農家として一部改造されていたが、城主の寝室として使われた書院付上段之間（八帖）、居間として使われた御次之間（十帖）など江戸初期の様式をそのまま残している。

※参考

「伊勢志摩を歩く」「神宮摂社末社巡拝」「玉城町広報」

「三重県の歴史散歩」「ふるさとの散歩道」「玉城町史」ほか